

水車 ~荒川上流域の農村風景を特徴づける施設~

精米などの他、産業や発電にも活用され、人々の生活を支えました。

荒川上流部改修から
100年
1918-2018



固定された上掛式の居水車



川の博物館の壁面に描かれた船車



船に水車を取り付けた船車

水の力を仕事に変える水車

荒川流域には多くの水車がありました。これらの水車は、ジグルマ(地車)、イスイシャ(居水車)といわれるタイプとフナグルマ(船車)、フナスイシャ(船水車)といわれる2つのタイプがあります。

麦作地帯が広がっていた寄居町から旧川本町(現深谷市)周辺の荒川では、川船に水車小屋を乗せた船車で小麦粉をつくっていました。これは、荒川の水位の増減に影響されることなく製粉を営むことができ、万一の大水の際には船車を避難させることができました。荒川の特徴をよく知っていた人々の知恵そのものでもありました。

▶ 源流部(旧大滝村)の水車

旧大滝村では、製材・精麦・雑穀をついたり、自家発電用としても使われていました。支流の赤平川沿いの旧両神村・小鹿野町では、イモの皮むきにも「ベッチャン水車」と呼ばれる水車が使われていました。このほか、和紙の原料となるコウゾつきにも使われていました。



東秩父の精米水車

▶ 河岸段丘(旧荒川村から長瀬町)の水車

河岸段丘の旧荒川村では、精米・精麦・製粉のほか、火薬の原料である硝石をついたりコンニャクの荒粉挽き・糸取り機用の動力としても使用していました。やや下流の皆野町・長瀬町では、埼玉県立川の博物館に展示している皆野のコンニャク水車のほかに搗臼・挽臼を持つ水車がありました。



皆野のコンニャク水車

▶ 扇状地域(寄居町から熊谷市)及び下流部の水車

扇状地域では、下掛け式の水車が一般的で製粉・精米精麦などを行っていました。また、この地域の川の中でよく見られた、川舟に水車小屋を載せた「船車」も水車の仲間です。熊谷市の神沼水車では、熊谷名物の五家宝の黄粉を作るために大豆の製粉を行っていました。

下流部の朝霞市では、銅を伸ばすための特殊な水車が使われ、産業の発展のシンボルとなりました。

また、水力発電所で使われる発電タービンを回す力も水車の原理を使ったものです。



発電水車

アクセス

埼玉県立川の博物館

交通：東武東上線「鉢形駅」下車、徒歩約15分、

「男衾駅」下車、徒歩約29分、

秩父鉄道「桜沢(埼玉県)駅」下車、徒歩約30分

住所：埼玉県大里郡寄居町大字小園39



埼玉県立川の博物館

